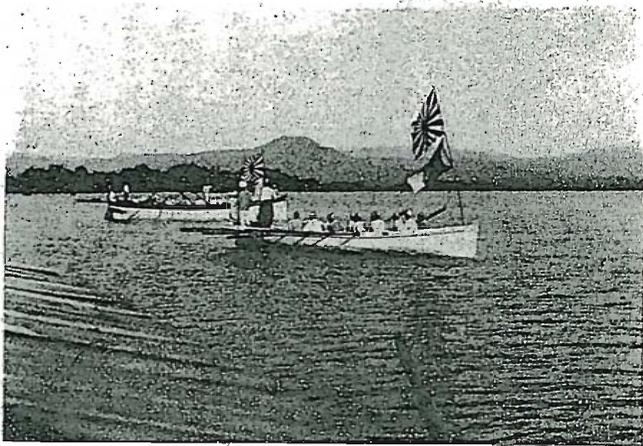


八 機ギグ 一艘（長三十尺 幅六尺五寸）

右貴府收容端艇本校生徒操艇術練習之爲メ備じ度候ニ付御差支無之候ハ、御讓與相成度此段及御照會候也
正確に記せば、バーヂの方は、長さ三十四呎四吋、幅八呎四吋、深き四呎八吋、積量二千立方呎強、オレゴン・



（順旅は後、連大は前）—タツカの上 湖壺

パイン製、ギグの方は、長さ三十一呎、幅六呎十吋、深き三呎二吋、（積量不明）、ティク材製であつた。而してその希望は達せられたが、バーヂの方は、帆その他調製する必要があつたけれども、その製式等不明に付、廻航の爲佐世保に滞留中の生徒富田定壽・吉田久太郎兩人へ指圖を乞ふ旨の依頼状を出し、七月末までに佐世保町宇濱田町海岸通船繋留場に於て修理を施し、前者には旅順、後者には大連と命名、八月二日、一旦百貫港に廻送の上、三日、百貫港を發し、四日、無事江津湖に安着した。廻漕の際には、握飯二籠、菓子類四箱、梨及び鶏卵數十箇、寶丹數袋、飲料水十餘瓶、照前燈四箇、蠟燭數斤等を備へ、本校生徒十六名の外、元本校生徒一名、商船學校生徒二名、攻玉社生徒一名、濟々巽生徒五名、數學院及び鵬翼舎生徒五名、凡て三十名の青年が、非常なる意氣込を以

カッターの構造

旅須・大連と命名
廻漕の概況

て漕いで來たもので、所載の寫眞は、當時の本校生徒の一人たる永村清氏の寄贈に係るものである。

かくて旅順・大連の二艘は、その後永く異様を江津湖上に留め、ボート・レースの際などにも使用されてゐたのであるが、何時の間にか姿を消して了つた。やがてそのことが時折生徒間の噂に上るやうになつたが、はからずも大正二年度龍南會新委員選舉場裡に於て表面化して、大問題を惹起したのである。けれども、その間の消息を漏すことは、色々の方面に差障りもあるので、同年三月十五日發行の第四百九十九號所載「龍南の春は未だ來らず」¹「吾人の見たる端艇事件」に譲ることにしたい。

八 私 的 の 諸 會

既記の諸會

本校部の龍南會、醫學部の研瑤會、工學部の工友會を公的のものとすれば、此等に對する私的のものとして、龍南會成立の過程たる金蘭會・研志會・擊劍會・土曜會や、九州史談會・中堅會等に就いては既に記した。而して歴史に於て古く、今日に及んでゐるものには、熊本高等學校基督教青年會（一名花陵會、後、第五高等學校青年會花陵會と改む）と、大日本佛教青年會熊本支部（後の五高佛教青年會）とがある。その他、硯友會・有終會・紫溟吟社・紅葉會・少詩會・泰東會・白雨會・二葉會・青柳會・龍南短歌會・白路社・社會科學研究會・エスベラント會・東光會・童話會・科學同好會・映畫同好會・哲學研究會・蒼龍社・吟詠會・洗心會等、數へ來れば流石に五十年の間には、時代と好尚とに従つて、色々の會が生滅隆替した。而して之が調査研究は、龍南精神運動史上から見ても、相當興味あることではあるが、凡てを網羅詳述することは、本書編纂の第一義とするわけでもないので、龍南會雜誌を通覽する間に見出したものの中、特色あるもののみを就いて、略記することにし

カッター姿を消す

た。

硯友會 (詩歌文章) 明治二十五年五月二十日發行の龍南會雜誌に據れば、「我校に於て詩歌文章に希望あるもの毎月一回或は山莊に或は水邊に或は郊外に筆硯紙墨を携へて相會し優樂吟詠以て終日の快を遣る會員二十餘名」とあり、明治二十八・九年本校一覽には、「雜誌部附屬硯友會綱領」までも掲げてある。

佛敎青年會 ○五高佛敎青年會 明治二十五・六年頃の創立と傳へられてゐる。當初は大日本佛敎青年會熊本支部と名づけられ、三十三年、五高佛敎青年會と改稱、大正二年には、市内長安寺町に待望の會館も竣功するの盛況を呈したが、往年會館を賣却して後は、昔日の俤もないやうである。

有終會 ○有終會 明治二十六年二月二十七日發行の雜誌に依れば、秋月教授を中心とする豫科一級生の會合で、「倫理を講明し、修身を實行すること」を目的せる特殊のものである。

花陵會 ○花陵會 明治二十九年五月二十三日、七人の盟友が、花岡山に連なる萬日山に於て、熱禱を捧げ盟約を結んだのが、本會の起原である。かくて明治四十年十一月二日を以て、會館の落成式を舉行し、後之が改築を行ひ、以て今日に及んでゐる。若し夫れ信仰生活の内容に至りては、茲には言明を避けたい。

紫溟吟社(短歌俳句) 明治三十二年十月二十五日發行の雜誌に従へば、數年前二三の發句熱心家に依りて創設せられたもので、四十年十二月二十五日發行の第百二十三號まで詠草を寄せてゐる。夏目教授(二九一三六)と消長を共にせることは申すまでもない。

紅葉會(和歌) 明治三十二年、文科二年生の創立に懸り、三十五年十二月二十一日發行第九十六號まで詠草

が見えてゐる。

小詩會 ○小詩會(和歌) 明治三十六年十一月二十五日發行の第百二號以後、四十年十二月二十五日發行の第百二十三號まで詠草を掲げてゐる。

泰東會 ○泰東會 大正二年五月二十五日、縣立圖書館階上に於て、盛大なる發會式を擧げた。在熊中華民國留學生との連絡を計ることを目的とするものである。(同年六月號參看)

白雨會 ○白雨會(文學・繪畫・考古學・ロシア語等) 大正二年、主として第一部(法・文)生徒間に於て組織せられ、展覽會を催したこともある。

○二葉會(洋畫) 大正七年五月の創立で、今日まで作品の展覽會を催してゐる。

青柳會 ○青柳會(音樂) 大正七年五月二十四日の發會で、尺八中心の音樂會であるが、其後の消息は不明。

○龍南短歌會 組織の内容は分らぬが、大正八年十二月二十三日發行の雜誌に、第一回詠草を載せてゐる。

白路社(短歌) 大正九年十一月二十九日、市公會堂に於て、第一回の會合を爲し、次いで「白路」を刊行、同人の外に、贊助員中には、教授を始めとして名流の名も連ねてゐる。

社會科學研究會 ○社會科學研究會 大正十一年、數名の同志の間に結成せられ、一時相當の會員を有してゐたが、同十三年十二月、解散を命ぜられた。

エスベラント研究會 ○エスベラント研究會 大正九年頃より、同志の者が集つてゐるが、同十一年に會の組織成り、相當の間續けられた。

東光會

○東光會 大正十二年四月二十日設立許可、同志六七名の結合を以て成り、同年五月七日、發會式を兼ねて講演會を開いた。爾來十五年、永續せる點に於ては、基・佛二會に亞ぐものであり、依然として立田山莊に本部を

置いてゐる。而して規約は、往年徳富蘇峰氏歸郷の際、揮毫を乞うたものである。

童話會

○童話會 昭和元年發會、熊本縣教育會明麗館に於ける日曜オトギ會の外、春秋二季の大會をも開いてゐるが、近年その消息を耳にしない。

映畫同好會

○映畫同好會 昭和四年七月發行の龍南第二百十號に依れば、起原未詳、會て一年足らずの間存在せる五高映畫研究會を併合したもので、會員の最も多いのは、時代の然らしむる所であらう。

哲學讀書會

○哲學讀書會 昭和四年成立、一年にして終了、十一名の氏名が錄せられてゐる。

蒼龍社

○蒼龍社(坐禪) 昭和八年十一月五日、坪井見性寺に於て結盟式を舉行、爾來同寺に於て毎週坐禪、今日に及んでゐる。坐禪を根柢として、人格の陶冶を期するを以て目的としてゐる。

科學同好會

○科學同好會 昭和九年二月一日を以て發會式を舉行、爾來今日



(書氏峰蘇富徳) 約規會光東

に及んでゐる。理科生徒を中心とすることは言ふまでもない。

吟詠會

○吟詠會 龍南會創立以前に溯るべきものであらうが、蒼龍社の一部として再興されたのは、昭和九年五月のことであり、後獨立して、今日まで毎週會合してゐる。

洗心會

○洗心會(書道) 昭和九年十一月二十日の夜、生徒集會所に於て發會式を舉行、毎週一回、習書の裡に俗腸を洗掃せんとするものである。

哲學研究會

○哲學研究會 昭和十年二月二十三日發會、一年を以て終了、會員名簿中、理科生も記されてゐることは、前記の讀書會と同様である。

龍嶺怒號會
蘇鳴會
山上會
翼三三四
等

以上の外、大正五年頃の「龍嶺怒號會」、同十年頃のクラス同人會「蘇鳴會」(國文研究)、同十五年頃の「山上」(短歌)、「翼」(詩)、「三四郎」(創作)等の同人會に至るまでを列挙すれば、かなりの數に上るであらう。又、各種の會には、顧問若くは賛助員として、教授の名も記されてゐるものも少くないが、悉く省略した。

九 來 校 の 名 士

畏くも 今上陛下の行幸や、各宮殿下の台臨に就いては、或は一章を設け、或は一節を充て、或は本章第一項に謹記したが、文部大臣や大隈伯(後の侯爵)を始めとして、幾多名士の來校があつたことも、在學當時の人々には、夫々の記憶があるであらう。故に前記の杉浦・濱尾二氏等を除き、主として學校の記録や龍南會雜誌等に散見する主なる人々を、年代順に列挙することも、強ち無用の業ではないと思ふ。而して各種の式目に臨場せる人々を記すことは、煩に堪へないので之を略することとした。(*印は本校卒業生)